

京都における日本庭園について

京都大学大学院 地球環境学堂
教授 柴田昌三

京都迎賓館の日本庭園の管理の在り方に関し、日本庭園の専門家として、一般的な点をご説明したい。

日本庭園は環境と文化を一つの空間に収斂させた空間芸術であり、その評価は国際的にも高い。日本庭園の維持管理においては、自然の本質を追究する深い洞察力を基盤として、自然と人のかかわりを踏まえながら、「景」としての多様性と繊細さを空間に表現するために、「人の手技」によって自然素材を巧みに利用し、持続的かつ循環的な工法や技能が統合される。

すなわち、庭園は工事の竣工時に完成するのではなく、竣工直後の空間表現に加えて時間的経過を念頭に入れて継続的に行われる空間の創出である。庭園は優れた育成管理によって初めて醸成する。そこでは、その土地の気候や風土に馴染んだ「景」が、日々成長する樹木や草木の数年先の姿を予測し、手技を駆使することによって熟成していく。これによって様々な形式と多様な景観が形成されることになる。

また、「京都迎賓館」の庭園は、山紫水明の都・京都という歴史・文化的風土の中で千年にわたって育まれてきた日本の庭園文化の結晶といえよう。その優れた技術もさることながら、本質的には京都の庭園師一人一人の心に刻まれ続けてきている美意識の表出なのである。技術は学ぶことができても、美意識は自然的・文化的土壌によってのみ培われることを肝に命じたい。京都が培ってきた庭園管理技術を用いて、それを熟知した京都の庭園師が手塩にかけて作り上げてきた庭園である。京都に多数存在する名庭の多くは、奥深く物静かな景に趣が置かれているものが多い。これらの庭園はその所有者と庭園師が、作庭の意図を理解し、継承しながら管理してきたものであり、将来にわたる高度な管理水準を保ってきた。

京都迎賓館日本庭園も平成の大日本庭園として、その域に入っていく必要を持つ庭園であり、実際にその道を歩み始めている。庭園の手入れは一度不適切な管理を受けると、その回復は不可能になる、もしくは回復のために想像を絶する時間と経費が求められる結果を招く。日本庭園本来の育成管理のあり方は、「単に管理費の入札価格が低廉であること」で判断されるべきではなく、管理の質の確保を最優先とすべきと考える。

柴田 昌三

京都大学大学院地球環境学堂地球親和技術学廊 教授
京都大学大学院農学研究科森林科学専攻 教授（両任）

竹・笹類の研究における第一人者

その他、里山や文化的景観等の研究、造園植物の植物学的研究